

蜃気楼に関する歴史的資料について

大鐘卓哉（小樽市青少年科学技術館）

1. はじめに

蜃気楼が、江戸後期になって比較的頻繁に絵図などに登場するようになった（井上1990^[1]）。それらの資料から、江戸後期における蜃気楼現象に対する関心の高さが伺える。しかしながら、実際の蜃気楼現象を観測したと考えられる資料は少ない。そこで、本研究では、江戸後期における蜃気楼に関する歴史的資料についての考察をする。

2. 各地域における資料

(1) 伊勢湾

江戸期には蜃気楼の名所として三重県四日市が知られており、「東海道名所図絵^[2]」には、名所案内として上位蜃気楼を想像させる具体的な記述や、挿図が掲載されている。また、「東海道五拾三對^[3]」などの蛤が気を吐いている蜃気楼を題材とした錦絵が、四日市・桑名で数多く残されている。さらに「尾張名所図絵^[4]」には、愛知県内海も蜃気楼の名所と記され、周防（山口県）と越中（富山県）の現象と同じであると記述している。

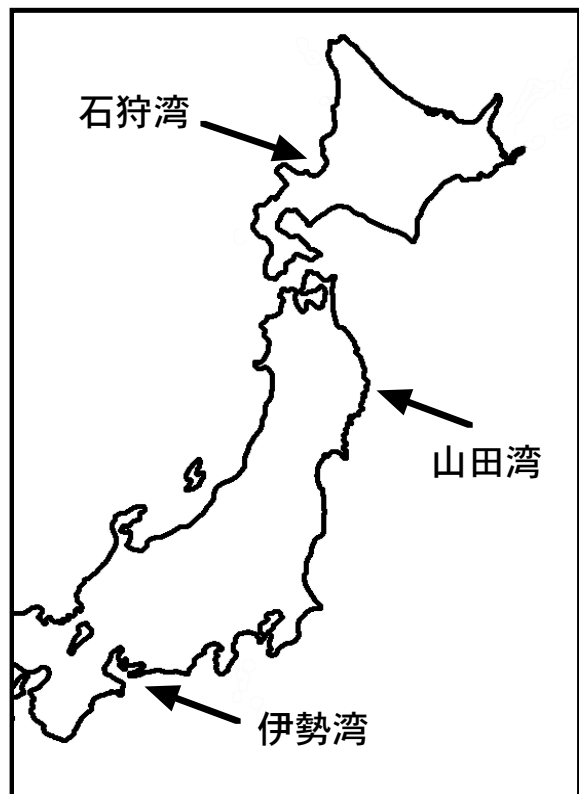
(2) 石狩湾

幕末の弘化3(1846)年、北方探検家・松浦武四郎は、北海道小樽沖の石狩湾近くで蜃気楼を見た。「三航蝦夷日誌^[5]」に挿図と共に記している。その具体的な記述から、上位蜃気楼であると考えられる。その中に

は、周防の海岸、伊勢の津から桑名の浜、越後（新潟県）糸魚川、南部（岩手県）山田が蜃気楼の現れる場所と記述している。

(3) 山田湾

岩手県山田ではかつて蜃気楼が見られたことが「遠野物語^[6]」で語り継がれている。また江戸の浄瑠璃語り・藤原衆秀の旅日記「筆満可勢^[7]」に、文政12(1829)年に山田で蜃気楼を見たことが記されている。毎年春に見られ、その記述から上位蜃気楼であると考えられる。その中で、蛤が気を吐いて竜宮城を描いた絵図にもふれ、「東海道名所図絵^[2]」を引用し伊勢桑名のことを記述している。



石狩湾・山田湾・伊勢湾の位置

3, 蜃気楼資料の考察

江戸期の交通の要所であった伊勢の桑名・四日市において、蜃気楼現象が見られることは、「東海道名所図絵[2]」により当時多くの人に知られていたことが考えられる。伊勢湾周辺の多くの絵図は、実際の蜃気楼を表現したものではなく、蛤と蜃気楼を結びつけた想像的な表現となっているが、蜃気楼現象が広く一般に普及していたことを示している。藤原衆秀は、「東海道名所図絵[2]」を引用しており、それが蜃気楼の情報の元となっていることがわかる。

一方、松浦武四郎は、伊勢の出身であることから、伊勢湾の蜃気楼に関する見聞は豊富であったと考えられる。日本各地を歴遊した松浦武四郎は、各地の名所図絵等を熟読していたと言われていて、おそらく「東海道名所図絵[2]」と「尾張名所図絵[4]」には接していたと想像できる。

「三航蝦夷日誌[5]」で周防の蜃気楼に触れていることは興味深く、その元資料が、「尾張名所図絵[4]」の可能性はある。あるいは周防歴訪時の見聞の可能性もある。

また「三航蝦夷日誌[5]」で述べている山田の蜃気楼については、松浦武四郎が諸国歴遊の結果得た情報なのか、なにか出典資料があるのかは不明である。少なくとも「筆満可勢[7]」との関連はなく、山田もしくは周辺地域歴訪時の見聞の可能性もある。

4, 今後の課題

江戸時代に上位蜃気楼が見られた地域では、現代でも上位蜃気楼が観

測されている[8][9][10]。蜃気楼の歴史的な資料は、本研究で示された以外にも数多くの地域で存在している。それらの整理と関連性の考察は今後の課題であり、それらの地域における現在の蜃気楼発生状況を明らかにする観測が望まれる。また、明治・大正・昭和初期における蜃気楼の資料について調査を行い、その時期における蜃気楼の認識を研究することも重要であると考え

参考資料

- [1]井上研一郎,1990,蜃気楼図考,北海道立近代美術館等紀要,p4-18 [2]1797,東海道名所図絵 [3]歌川豊国,弘化期,東海道五十三對四日市 [4]1 845,尾張名所図絵 [5]松浦武四郎,1850,三航蝦夷日誌 [6]遠野常民大学編,1997,筑摩書房,注釈遠野物語 [7]藤原衆秀,1841-42,筆満可勢(東北大学附属図書館蔵) [8]大鐘卓哉,2001,石狩湾の小樽沖に発生する上位蜃気楼,気象学会春季大会予稿集p350 [9]大鐘卓哉,2001,江戸時代に見ることができた四日市の蜃気楼は現代でも発生していた,気象学会秋季大会予稿集p330 [10]大鐘卓哉,2003,岩手県山田湾における蜃気楼,気象学会秋季大会予稿集p329